

北里大学病院におけるクラウドデータベース上 CGM 運用の取り組みと臨床検査技師の役割

◎篠原 亮太¹⁾、土筆 智晶¹⁾、矢島 千陽¹⁾、中島 悠¹⁾、河島 江美¹⁾、棟方 伸一¹⁾、中村 正樹²⁾、狩野 有作²⁾
北里大学病院 臨床検査部¹⁾、北里大学医学部 臨床検査診断学²⁾

【はじめに】糖尿病領域において持続グルコース測定 (CGM: continuous glucose monitoring) を用いた診療および臨床研究が拡大している。近年、間歇スキャン式 CGM である FreeStyle リブレやリアルタイム CGM である Dexcom G6、sensor augmented pump のメドトロ 770G が実臨床で普及し、患者のグルコース記録をクラウドシステム上で管理できるようになった。本方式の推進により、実臨床における血糖測定記録管理の簡便化が期待されている。

【運用状況】北里大学病院では、以前より臨床検査技師が糖尿病診療に携わり、CGM やインスリンポンプを使用している糖尿病患者の診療が円滑に進められるよう、糖尿病患者のための外来業務に従事している。CGM データの管理・出力の他に、治療方針決定のための診療部カンファレンスに参加している。また、従来の自己血糖測定や CGM の運用については、患者が来院時に血糖測定記録を医師に手渡すか、診察前に臨床検査技師ないし看護師が患者の持参した CGM リーダーなどから血糖記録を抽出し、そのデータに基づき面談を行い、その後医師が診察を行う、という運

用が実施されていた。

【新たな取り組み】今回、我々はよりきめ細やかな診療体制の構築を目的として、CGM データをクラウド上で管理し、[1] 週 2 回の頻度で、CGM レポートを出力し、[2] 患者の診察日までに CGM データをカンファレンス (血糖コントロール状況の確認、今後の療養相談の必要性の確認など) で共有する体制を整備した。しかし、当院での CGM 及びインスリンポンプを使用している患者数は増加傾向にあり、1 回の事前準備の際に 20~50 件の CGM 事前出力が必要となり、臨床検査技師の糖尿病診療支援業務を継続することが困難となった。よって、タスク・シフト/シェアの観点から、診療アシスタントに協力を要請し、臨床検査技師が事前出力の該当となる患者データをリストアップしレポート出力を依頼することにより、従来の診療支援業務と CGM 業務の対応を並行して行うことができるよう、運用を再整備した。【まとめ】以上の様な、当院における現在までの取り組み状況を紹介するとともに、問題点と今後の展望について報告する。 連絡先-042-778-8111(7725)